



TITLE:

<図書紹介>Hydrologic Data (Thailand),
National Energy Authority, Ministry of
National Development, Thailand, 1965

AUTHOR(S):

南, 勲

CITATION:

南, 勲. <図書紹介>Hydrologic Data (Thailand), National Energy Authority, Ministry of
National Development, Thailand, 1965. 東南アジア研究 1965, 3(2): 147-148

ISSUE DATE:

1965-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55063>

RIGHT:

(3) Kraisri 氏による, Mrabri 語および近隣のモン・クメル系諸言語の対照語彙表と, かつて Bernatzik が発表した Yumbri の語彙と Mrabri との対照表, (4) C. Velder 氏の, Mrabri camp のはじめての記述, および (5) W. Smalley による前記語彙表の言語学的な注釈ノート, の5篇である。

この調査ではとくに Kraisri の言語調査に重点がおかれたようであり, 実際, 本書の対照語彙表も, Mrabri 語のみならず他の北タイのモン・クメル諸語(カー諸語, ラワ語, モン語など)がほとんどこれまで未発表のものであるから, Mrabri に限らずこの系統の言語に関心をもつものにはまことに有難い資料である。残念ながら, (本書全体がそうであるが) どちらかといえば一般向きに書かれているため, たとえば, Smalley の注釈にもある通り音表記の方法が余りに粗雑であり, おそらく著者たちの意図以上にはとうてい利用できないであろう。Boeles 氏はいくつかの今後の課題として, Mrabri 語と他のモン・クメル諸語との比較および Mrabri 語の音韻論の研究をあげているが, 実際には比較言語的研究に先だってまずその言語の音素体系が明らかにされなければならないのである。

文化にしても, 専ら material culture について述べられていて social structure や他の民族との接触の問題は残された課題とされているが, この調査自体が著者のいうように pilot project なのであって, 対象が対象だけに有益でもあり読み物としても結構面白い書物となっている。(三谷恭之)

S. Takdir Alisjahbana: *The Failure of Modern Linguistics in the Face of Linguistic Problems of the Twentieth Century*. Kuala Lumpur, University of Malaya, 1965. 36p.

本書は, 著者が1964年12月22日にマラヤ大学で行った inaugural lecture であって, 当センターから同大学に留学していた前田成文氏からわたくしに読むことをすすめられたものである。

内容は, アジア・アフリカ地域の若々しいエネルギーを感じさせるもので, 極端なまでの言語学の現状批判と, この地域の国々が直面している現実の言語問題を解決するための新しい言語学創設の提唱である。

著者は, アメリカの構造言語学にしるヨーロッパの glossematics にしる, 現代の言語学は現実社会から遊離した実質的意味の乏しい学問になっていると強く非難している。音韻という言語の外面に専ら関心を集中したり, esoteric なまでの形式主義に陥っている, といい, とくに, 言語がそれ自体で安定した記号の体系であって言語学はそれを記述する学問だという根本前提がそもそもの誤りだという。なぜなら, 現実の困難な問題は言語の変革にあるのだから, というのである。

A A諸国が現在まじめにとりくんでいる nation building と modernization の問題のひとつとして, 各国とも言語の standardization と modernization の問題がある。安定した national language をいかに形成していくか, 近代社会にマッチした思考とコミュニケーションのためにいかに言語を合理化するか, 次々に入ってくる新しい概念に対する語彙の問題をどう処理するか, こういった language engineering こそが必要なのだ, というのが著者の主張である。本書の後半では, マレー語とインドネシア語について具体的な問題をひとつの例として簡単に説明している。

現代言語学がしばしば形式的・表面的であることはこれまでもむしろ伝統的な言語学者から批判されてきたし, 現実の問題解決に対する意欲にけることも確かであって, この点は何よりもまず強く反省されてしかるべきであろう。しかし, 著者が現代の言語学の範囲を狭くみすぎているということは別としても, この書の提起する問題はあまりに大きすぎる。第一にそれがもはや学問論の問題に関連していること, 次にこのような問題解決に果たして構造言語学の考え方自体が本質的に無効なのかどうかということ, また現実の問題といっても著者の立場とは別にわれわれにはまずそれが外国語の問題であるということ, こういった点で著者の主張がすべての言語学者たちを納得させるか, どうであろう。(三谷恭之)

Hydrologic Data (Thailand): National Energy Authority, Ministry of National Development, Thailand, 1965.

タイ国の全般に渡っての水文資料の年報であり, その内容は流量記録, 浮遊流下土砂量, 日降雨量, 日蒸発量, 風速におよんでいる。

本書は Mekong プロジェクト, Nam Pung プロジェクト, Pattni プロジェクト, Nakorn Srithamarag プロジェクトおよび河川開発プロジェクトにおいて, National Energy Authority によって作業をされ集計されたものである。最大の目的は降水量と流出量との関係を研究するにある。

流量観測所の数は46ヶ所である。内容は月間流出量, 平均流出量 1000km² 当りの平均流出量, 流出高, 流出量, 最大日流量および最小日流量がある。

なお, このうちの観測所の一部はメコン河開発の一環として建設された部分も含んでおり Lower Mekong Hydrologic Yearbook と多少重複する点もあるが, 東北タイの水利計画に対する研究を行う場合の重要な参考資料の一つと考えられる。

1962年の水文年報は1964年に出版され, 1963年のものは1965年に出版されたが, 何れも販売はしていない。何れも市販されていないもので寄贈形式で頒布されている。(南 勲)

Lower Mekong Hydrologic Yearbook.
Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong River Basin, 1964.

メコン河は4ヶ国にまたがる大河川でありその水力電気, かんがい, 舟行, 洪水調節および民生に対する総合的な発展を目的として, カンボジア, ラオス, タイ, ベトナムの4ヶ国により, メコン河委員会が設立されている。本水文データはこれらの諸国の水利開発分野で各国それぞれに重要な基本的な資料である。とくに水源計画に際しては技術的にも経済的にも重要な資料である。本書により低部メコンの流量特性の概要をつかむことができる。

最初の年報は1962年の水文資料に対するもので, 以後毎年継続して出版することが決定されている。1963年度の水文年表は1964年2月に出版された。

本水文年表はその初版から数えて現在まだ第2巻しか出ていないが, 東南アジアの水利計画を研究する上に極めて重要な資料となるものと確信している。

本水文年表の内容は流量観測値がメコン河本流ならびに支流に対して集録され, 次に流水中に浮遊運搬されている泥土量, 日降雨量がラオス・カンボジア・タイ・ベトナムに渡って記され, また日蒸発量および毎

日の風速が記録されている。

いずれも販売はしていない。(南 勲)

Theodore Friend: *Between Two Empires, The Ordeal of the Philippines, 1929-1946.* Yale University Press, New Haven, Conn., 1965. xviii+312p.

このたび「2つの帝国に挟まれて——1929年から1946年に至るフィリピンの試練——」と題する本書を手にして, 私はひじょうに嬉しかった。というのはフィリピンを理解するためには, その歴史的背景をよく知っておくことが必要である。とりわけ, フィリピンとアメリカとの関係の歴史的展開こそ, フィリピン理解の鍵であるといえよう。ところが, これについてまとまった文献がこれまで出版されていなかった。

もともと米比関係は, 本書の著者, The State University of New York at Buffalo の歴史学準助教授フリード氏によると, つぎのように区分される。

- 1) 1896—1902: スペインおよびアメリカにたいするフィリピンの革命戦争。
- 2) 1901—13: 共和党政権下での政府・教育の《アメリカ化》。
- 3) 1913—21: 民主党政権下での行政の《フィリピン化》とナショナリズムの奨励。
- 4) 1921—29: フィリピンの希望とアメリカの抑止との均衡の漸次的実現。
- 5) 1929—35: 第1次植民地危機: 大恐慌・日本の膨張およびフィリピンのナショナリズムのためアメリカ議会は独立のスケジュール設定の方向に動く。
- 6) 1935—41: コモンウェルス時代: 不確実だが部分的に成功であった独立準備。
- 7) 1941—46: 第2次植民地危機: 日本の侵略および部分的な《日本化》, アメリカによる解放およびフィリピン主権の完全な獲得がつづく。

本書はこのうちでも, より重要な1929年の大恐慌から始って1946年のフィリピン独立に至る期間をとりあつかう。著者は, フィリピン, アメリカ, および日本の文書を渉猟し, またこの3国にまたがるこの関係をインタビューしている。非常な努力と時間のかかった仕事だ。(アメリカ人の近代史あるいは現代史研究がとっているこの方法は, わが国ではもっと学びとら